

高木兼寛の愛国思想

晩年の高木兼寛は、国民の衛生思想の普及や体力増進のために、また東洋的人生観による精神修養を説くために、広くまた頻繁に講演行脚に出かけている。さらに講演だけではこと足りず、『精神修養と大和魂』という著書まで自費出版し、これを全国の学校へ無料配布している。かつては急進的な洋化主義者と目され、鹿鳴館運動にも積極的に参加した兼寛が、晩年に至ってまさに百八十度の転回をなし、国粹的にさえなったというので、これが話題となり、なかには「君子豹変す」とまで言った人がいたらしい。

しかし、兼寛 (1849-1920) という人物にじっと視点を当てて、その思想的変化を子細に検討してみると、そこには必ずしも世間が評判するほどの断層的転回はみられず、むしろ彼本来の科学的真理に対する忠実な態度によって一步一步自分の思想を築いていった様子が明らかになってくるのである。また兼寛の思想を、西洋的な物質文明と東洋的な精神文明とを結び付けたという意味で“和魂洋才”と評する人もいるが、彼の思想は必ずしもそういうものでもなく、むしろ明治の文明開化とともに生きぬいた彼自身の軌跡、あるいは苦渋に満ちた彼自身の創造物といった方がいい様な気もするのである。

兼寛が生きた時代を振り返ってみると、それは長い封建時代から明治維新を機に急激に近代化していく激しい過程に当たるわけで、日本の歴史の中でも極めて希有な思想的動乱の時代であった。「忠君愛国」という言葉をとってみても、維新の前までは「君」とは自藩の藩主すなわち殿様のことであり、「国」とは自藩の領地のことであったに決っていたものが、維新後は「君」とは天皇を指すことになり、「国」は日本全体を指すことになってしまったのである。明治維新は周知のように、幕藩体制の日本が西欧の帝国主義列強に対抗して

いくためにどうしても必要な革命であったわけだが、そこに住む人々にとっては、価値観の劇的な変動のために、その精神的ショックは大きく、また多くの犠牲が強いられたのであった。そのことは、昭和20年の敗戦を境にして狂気じみた軍国主義と外来の民主主義の間の思想的断層に遭遇したわれわれの世代にはよく分かるのである。

薩摩藩にたいする忠誠心

兼寛は嘉永2年(1849)薩摩藩の郷土の子として生まれた。明治維新の内戦戊辰の役が始まったとき(1868)、兼寛は鹿児島において蘭医・石神良策(1821-1876)に師事し医学を学んでいた。兼寛は師・石神とともに軍医としてこの戦争に参加することになった。彼は京都、江戸、宇都宮、白河を経て会津戦争に向かったが、会津若松に着いたときにはすでに若松城は落城していたので、二本松、磐城平に至り、東北の平定が終了した時点で帰郷した。彼は軍医であったため激しい戦闘には参加しなかったが、この従軍によって、医師としてきわめて貴重な体験をした。一つは英医ウィリスのすばらしい医術を見たことであり、もう一つは自分の医術が全く未熟であることを思い知らされたことであった。ウィリスは戊辰の役に動員され、負傷者の手当てに目覚ましい活躍をしていたが、兼寛は軍陣病院で彼のすばらしい外科手術をみせられたのである。ウィリスによると当時の日本の医師は、その技術はみすばらしいもので、とくに薩摩の軍医はひどかったという。この戦争では官軍各藩の軍医は協力して負傷者の手当てをすることが多かったが、そのような時、兼寛の腕前は随分見おとりしたらしい。兼寛の手当てをみていたある大村藩の軍医などは『薩摩には医者はおらぬらしい』と大声で笑ったほどであった。

兼寛は、この体験を自分の恥辱として受けとったばかりでなく、薩摩藩の恥辱として受け取り、今後薩摩藩としては西洋医学を十分に採り入れ、この藩の恥辱をなんとかして晴らさねばならないと決心した。彼は、その後、多くの人に『薩摩藩の存在は、あらゆる方面に抜群であつたけれども、学術の方面では如何ともする術はなかった。自分はいよいよ決意を新にして、この

方面で薩摩藩の実力をしめさねばならないと考えた』と語っている。我々はこの言葉のなかに、彼の薩摩藩にたいするひたむきな忠誠心（プライド、愛情）と西洋医学にたいする強いあこがれを感じることができる。

ただこの場合、彼の薩摩藩にたいする忠誠心は、そのころ武士たちが一般にもっていた藩主にたいする忠誠心とは若干異なっていたように思われる。そのことは、彼の残した次のような逸話によっても推察できる。後年ある宴会で旧藩主といっしょになった兼寛は、旧藩主にむかって『昔は殿様というと、家柄、格式だけが立派で、案外平凡な人が多かったらしいですが、あなたはどんなものですか』と無遠慮にきいて、まわりの者をひやひやさせたというのである。これをみると彼の忠誠心なるものは、藩主にたいするよりも、むしろ薩摩の人々とか、薩摩の山河にたいするものであり、今日の我々の郷土愛に近いものではなかったかと思うのである。

（これは余談である）戊辰の役のおり、兼寛が会津若松に着いたときには若松城はすでに落城していたが、その直前まで激しい戦闘が繰り返されていた。会津藩にはもうすでに戦う力はなかったが、なお戦える余力があることを見せるために、子供たちに城内から旗を挙げさせた。城内はまだ子供たちが旗を上げるほど余裕があることを示すためであった。懸命に旗をあげた子供のなかに山川捨松という女兒がいた。彼女はのちに大山 巖と結婚し、大山夫人として兼寛をたすけ、有志共立東京病院看護婦教育所の設立のために一肌脱ぐのである。運命というのは面白いものである。

明治海軍と脚気

戦乱もおわり、薩摩藩も西洋医学の力をみとめて鹿児島に藩立の医学校・鹿児島医学校を開校した。兼寛は早速この学校に入学した。兼寛にとって幸いなことに、畏敬するウィリスがこの学校の校長として招聘された。彼はウィリスの助手をつとめながら英国医学を新鮮な気持ちで学んでいった。しかし、ウィリスの勧めもあって、彼の希望はさらに大きく広がり、自分も英国に留

学して、さらに高等な医学を学びたいと思うようになった。彼の学友たち(園田孝吉、河村豊洲、有島 武ら)はこの望みを頼もしく思い、さっそく中村敬助(兼寛幼時の先生)、毛利強兵衛(郷里の地頭)らに相談したところ、海軍に入ることが英国留学への最も近道ではないかということになった。明治5年(1872)4月、彼は上京し、海軍軍医としての生活が始まった。

実際に海軍で働いてみて最も驚いたのは、脚気にかかる兵隊があまりにも多く、しかもそのうちの多くの者が死んでいくことであった。全国から徴兵された若い兵士が、このようなかたちで次々と死んでいくのを見るのは耐えられないことであった。しかもその頃、維新政府が第一にしていたことは、外国に備えるための軍備であった。それまでの軍備は国内の秩序維持を当面の目標にしたもので、これをすみやかに外敵に備えるためのものに改めねばならない時期にきていた。山県有朋(陸軍卿)はこれを「此時にあたり常備精兵を備え無数の予備兵を設け、戦艦を造り砲台を築き、将兵を育し武器弾薬を製造貯蓄するに至っては、是れ必要の大事にして止むべからず、一日も備えざるべからざるものなり。今日四海万国皆然らざるなし。いわんや北門の強敵日に迫らんとするの秋(トキ)に於いてをや」と主張していた。

上京いらい兼寛の考え方は漸次変わっていった。もう薩摩がどうの長州がどうのという時代がすっかり過ぎ去ったことを感じていた。彼は全日本海軍(の衛生)のために力を尽くさねばならないと考えようになった。このようなことが、彼に英国留学をさらに急がせることになった。そのあたりのことを彼はこう述べている。「当時の帝国海軍の衛生状態はこのようなので、まず脚気の原因とその治療法を発見することが、私の強い願望になりました。そして、そのためには外国で医学を基本から勉強し直さねばならないと考えました。それからというものは、この願望は私の脳裏をひとときも離れたことはありませんでした」と。

面白いことに、兼寛は明治8年1月に東京府に眷属替をしている。つまり本籍地を東京に移したのである。このことは今日ではなんでもないことであるが、当時としては相当重大な出来事であった。しかも母親(園)がまだ郷里で存命中の出来事である。従来、兼寛のこの眷属替の意味はよく分からな

いとされてきたが、しかし上の事情をつぶさにみると、その行為は当然のことのように思えてくるのである。薩摩の里は郷愁の対象にはなっても、もはや忠誠心の対象にはなくなってしまう。そして、新しい忠誠心の対象は維新政府がつくりつつある統一国家に変わっていったのではないか。彼にとっては、もう本籍などは何処においてもよく、できれば便利な方がよい位に思ったのではないだろうか。

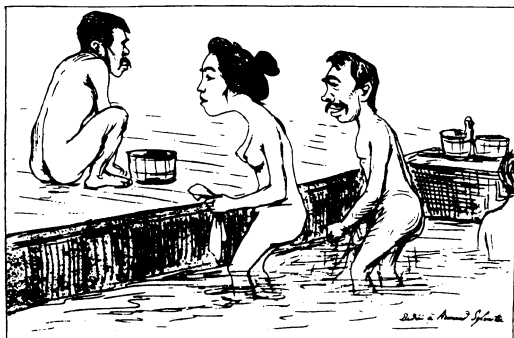
その頃（明治一桁代）は、まだ心情的にも政治的にも武士の立場を脱却できない士族大衆が大勢おり、彼等は中央政府に強い抵抗の姿勢を示していた。これがのちの佐賀の乱、萩の乱、西南戦争に発展するわけであるが、兼寛はこれらの人達とは一線を画していたように思われる。恐らく兼寛には、これら大衆は武士という一つの階級に拘泥しすぎ、藩閥という古い考えに執着しすぎる不平分子に見えたのではないだろうか。上の眷属替はこれらの人々に対する強い反逆の現れとみることもできる。

明治8年6月、兼寛は海軍軍医を免ぜられ、海軍生徒として英国留学を命ぜられた。そしてセント・トーマス病院医学校（ロンドン）でようやく英国医学を学ぶことになった。

日本国民の保健衛生のために

彼は5年間そこで医学を学んだのち、明治13年（1880）11月に帰国した。医学以外にも見聞したものが多かった。英国医学を支える社会的背景—人道主義—についても十分学ぶことができた。しかし、この5年間彼を最もとらえ続けた問題は、おそらく日本が貧し過ぎることだったのではないだろうか。英国人にくらべて、貧しいものを食べ、貧弱な体軀をして、しょっちゅう病気にかかり、そして若くして死んでいく日本人のことだったろうと思われる。海軍の脚気もこの一環としてとらえねば解決できないように思われた。

当時の日本人の栄養の貧しさについては多くの資料が残っているが、江藤新平（司法卿、参議）にまつわる次のような逸話なども、彼が士族であっただけに尚更印象的である。ある病気で外人医師にかかり、幼時に食べていた食



ビゴー『日本人の生活』(明治31年)より。混浴中の男女のこのあられもない姿こそ、その頃の日本人のもっとも典型的な体格を表現しているといわれる。因に当時、身長のもっとも高いのは男性では20歳で157センチ、女性では18歳で145センチであり、体重は同年の男性で50キロ、女性で45キロであった。

事についてきかれたとき、江藤は何ともいえぬ表情で『自分らの食べていたものなど、貴殿らにはとても恥ずかしく話せるものではない』といって黙しく語らなかったというのである。繁栄の最中にいる我々からはとても想像できないような悪い栄養状況にあったのである。このような栄養の悪さが、体力を減退させ、病気にからせ、次々と

若い命を奪っていったのは当然であった。明治20年代までの日本人の平均寿命は大体20歳台であり、明治30年代になってやっと30歳台を越え、40歳を越えたのは大正に入ってからであるという恐ろしい資料が残っている。

帰国した兼寛は、まず「病気に苦しむ人を救済する施設を作ることが日本社会の義務である。人間の何よりの苦しみは貧乏のうえに病気をすることである。これを救わねば日本の発展はありえない。とにかく貧乏人のための施療病院を作らねばならない」と考えたのであった。すでに東京には府立の施療病院が一つあったが、これも経費不足で明治13年に廃止されている。設立してわずか3年であった。これも兼寛を憤激させるタネであった。「施療病院は社会事業、救済事業の基礎であり、したがって日本文明の基礎である」というのが、兼寛を施療病院建設に立ち上がらせたモチーフであった。このようにして、多くの人々の援助によってできあがったのが明治15年に設立された有志共立東京病院であった。同病院内には医学校(後の東京慈恵会医科大学)、看護婦教育所(後の慈恵看護専門学校)も併設された。

同病院はさらに拡張されることになり、その趣旨に賛同された皇后は病院

の総裁をお引き受けになられた(明治19年)。名前も東京慈恵医院とあらためられ、経費は主に皇室資金によってまかなわれることになった。兼寛の夢は大きく前進したのである。

ただ、その後の経過をみると、兼寛が最初に描いた理想像からはかなり小さいものに終わってしまったような気がしないでもない。有志共立東京病院の設立趣意書には「人民が多いところにたった一つの施療病院をつくっても、すべての貧民の疾患を救済できるものではない。もとより、幾つかの病院を設置して、ひろく医療を施すことが、有志者の大いに望むところではあるが、如何にせん今はそのような大業を企てる時期ではない。今としては、ひとまず一つの病院を設立して、まずその大業を開かんと欲するものである」と述べているからである。筆者の勝手な想像であるが、彼は同じ思想で全国各地に同系列の病院をいくつかつくる構想を描いていたのではないかと思うのである。彼は晩年、国民の体位向上、保健衛生のために情熱的に全国を講演旅行しているが、それは、最初に描き、そして果たせなかった理想を、少なくとも補足充足する意味であったのではないかと思われる。

海軍脚気の絶滅のために

帰国早々の兼寛が着手したもうひとつの仕事は海軍脚気の予防と治療であった。この問題は国民の保健衛生施策の一環であったが、急激な富国強兵を目差していた当時としては、より差し迫った重要課題であった。兼寛が帰国した翌々年(明治15年)には、軍備拡張の急務を告げる詔勅が発せられている。内容は、“国家の独立には強大な兵力が必要であるが、わが国の軍備はその点において甚だしく不十分である。隣国(清国)の軍備が着々充実にむかっていることを考えると、軍備の拡張は実に焦眉の急である”というもので、これに国民の協力を要請したものであった。しかし現実的には、より一層の焦眉の急は脚気の予防、治療であり、これなくしてはいかに軍備を拡張しても戦力にはなりえないからであった。その頃の(海軍)脚気罹患率がつねに30-40パーセントであったことを考えれば当然のことである。兼寛自身も当時の状況を非常な危機意識でみており、こんな言葉をのこしている、「帰国

して海軍病院で診療してみると、脚気患者の状況は留学前よりさらに悪化していた。脚気の原因、治療法が発見されることなくこのまま過ぎれば、わが国の海軍は一朝事あるとき何の役にも立ちえない。そのことを思うと、じっとしてられない気持ちであった」と。

とくに海軍中枢部がショックだったのは朝鮮事件（1882）であった。朝鮮で暴動がおこり、日本公使館がおそわれたため、日本海軍の金剛、比叡、筑波の三艦が出撃し、仁川沖で清国（朝鮮の宗国）の巨艦 定遠、鎮遠と40日にわたってにらみ合った。しかしこのときの日本軍の状態はさんたんたるもので、6割以上の兵隊が脚気で倒れており、とても戦える状態にはなかったのである。敵に知られなかったのが幸いであった。

兼寛の脚気に関する研究をここに紹介する余裕はないが、とにかく彼独自の方法によって、研究の末、その原因が食物にあることをつきとめることができた（1882、栄養欠陥説といわれる）。そして、この学説によって兵食の改善を行い（1884）、わずか1-2年のうちに海軍から脚気を完全に駆逐してしまったのである。このおかげで日清戦争（1895）、日露戦争（1905）に勝利することができたわけであるが、このことは、脚気による兵力の減退を誰よりも心配していただけに、兼寛にはこの上ない喜びであった。彼はその喜びを数多くの著書の序文に（自筆で）このように書いている。「かつて明治5年に海軍軍医の職につきしより意を国民の衛生に注ぎ、力を体育に用うることここに四十有余年の久しきに及びたり。その間海軍軍人の糧食を改正し、脚気病を未然に予防し、以ってその健康を増進するの議を建て、これが実行を務むるに至れり。然り而して日清、日露の両戦役に際し、わが海軍軍人の衛生最も良好にして、よく服役に堪え、また青島の攻囲、南洋の警備みな健康を保ち、その功を奏ぜしむ。余の欣榮とする所なり」と。

兵食改善と明治天皇

兼寛は脚気にたいする自分の考えで直ちに兵食を改善したかったのである

が、反対者が多く事態はそれほど簡単に進まなかった。そこで伊藤博文、井上馨、松方正義らの重臣に援助を求めて直接天皇に奏上申し上げることにした。

当時、天皇に直接奏上することは大変なことであり、緊張してほとんど言葉にならなかったといわれている。明治の元勳・山県有朋などにしても天皇の前では、恐懼してほとんど語れなかったと伝えられている。彼はそのことを人にきかれた時、「自分は維新前、三条の橋にひざまずいて皇居を奉拝した高山彦九郎と同様に、天皇を神（現人神・アラヒトガミ）と考えている。従って、御前においてはおのずから戦戦恐恐たらざるを得ないのである」と答えている。

それに較べると兼寛の奉上態度はより自然であり、人間的である。明治16年11月、赤坂御所で、川村純義（海軍卿）同道で奉上した要旨は次のようであった（大変長いので、ここにはその内容よりも、その調子だけにとどめる）。

「今やわが国の海兵、陸兵は多くの脚気病にかかります。これがために一朝事ある時に御用の欠くことのあるのを恐れまするからして、どう致しましてもこの病気を予防するということを計らなければなりません。また、近頃は多くの学生が脚気病にかかります。若い学生はわが国の後継者でありますから、これ等の者の多くが脚気にかかるようでは、学問は出来ませぬ。これはわが国運を妨げることになりますから、どう致しましてもこの病気を駆除することを計らねばなりません。この病気の原因を調査研究いたしまして、これを予防することが出来ますれば、日本国民および医学にたずさわる者の面目でございます。わが国にかくも多数発生する病気の原因が、外国の医師によって発見されるようなことでは、日本の医師のこの上もない不名誉でございます。是が非でもこれを早く究めなければなりません。脚気患者が死にますと死体解剖を致しますが、病気があるだろうと思うところを全く顕微鏡その他で検査しておりますけれども、未だその原因が分かっておりません。高木の考えでは、死んだ後に病的変化を調査するようでは脚気病の本当の原因は分からぬ、という考えをもったのでございます。……（ここで、兼寛は今までやってきた兵食に関する研究結果と見通しについて8項目にわたって詳細に述

べている。筆者注)。このような研究結果によりまして、海軍軍人の食料は、今までのものではないということが判明いたしました。何卒、陛下の御英断をもちまして、これをお改め遊ばされますように願わしゅうございます。また、兵食の改善につきましては現在の海軍予算では賄いきれませんので、この点につきましても御英慮を賜りますようお願いいたします」。

明治18年3月の二回目の拝謁に際しては、脚気の原因がよりはっきりしてきたこと、したがって有効な予防、治療の見通しができてきたことを確信をもって奉答しており、さらに同23年10月の三回目の拝謁の際には、自分のおこなった兵食改善によって海軍では脚気が完全に姿を消したこと、どうぞ御安心くださいと、誇らしくご報告している。とくにこの三回目には、最初の拝謁時に不安であった“脚気の原因が外国の医師によって発見される”こともなく、日本の医師によって、しかも自分によって発見されたことを、何をおいても聞いていただきたかったのではないだろうか。

このように彼の奉上した要旨を通覧すると、そこには彼の心中が素直に吐露されているばかりでなく、天皇にたいする姿勢までが素直に表現されているのがよく分かる。自然であり、人間的であり、天皇を神聖視したり、絶対視したりしていないところが却って好ましい。少なくとも、山県にみられたような天皇を現人神とみるような姿勢はまったく見出せない。このことは今、兼寛の愛国思想の実像を知ろうとしている我々にとっては気持ちのよいことである。山県の場合は、彼が尊崇したのは実は理念化された天皇であって、従って、実在の天皇が彼の抱く理念像から離れると、彼の態度は恭順ではなくなることがあったといわれている。例えば次のような挿話が残っている。崩御の十数日前、明治天皇は枢密院の会議に親臨されたが、その際天皇は平素と異なってお疲労のため議事の途中で仮眠された。そのとき、議長席にあった山県はそれに気づくと、自分の軍刀の先で床を叩き、その音で天皇は目を覚まされ、姿勢を正されたといわれている。

神格化することと人間的であることとは必ずしも平行するものではなく、かえって相反することすらあるのである。

明治45年7月、明治天皇は重体になられたが、兼寛は早速彼の医学校の職員、生徒全員をつれて毎日日比谷神宮に参拝してご平癒を祈った。その祈りの甲斐もなく天皇は崩御されたが、その大葬儀にも彼は全職員、全生徒をつれて馬場先門に整列し、奉送している。海軍兵食の改善にあたって、自分の話をよく聞き入れて下さった天皇にたいして心からお礼を申し上げたかったに違いない。また大正3年4月には皇后(昭憲皇太后)がなくなられたが、その大葬儀のときにも兼寛は職員、生徒全員をつれて奉送した。有志共立東京病院に大きい関心を示され、東京慈恵医院にはその総裁まで引き受けて下さった皇后の御好意にたいして心から感謝申し上げたかったに違いない。

欧化主義と兼寛

井上馨が留学を終えて英国から帰国したのは、兼寛が帰国する2年前(明治11年)であった。そして兼寛が帰国したときには、彼は新任の外務卿として迎えている。井上は兼寛に大きく期待していたらしく、各国公館に「この度、高木兼寛なるものが、英国の留学を終えて而も優等の成績をもって帰朝された。就いては貴公使並びに家族館員諸氏に於いて、万一同氏の診察を請わんと欲するならば、遠慮なく本省まで御申出で相成らば便宜を与える」と文書でふれまわっている。このようなこともあって、兼寛は井上にはとくに親しみをおぼえ、いろいろな指導、援助を願っていたらしい。

その頃、条約改正を悲願とする明治政府は、数年来の夢であった外国人の接待所、鹿鳴館を設立した(明治16年)。一階には食堂、休憩室、謁見室、書籍室、ビリヤード室などがあり、二階には舞踏室の他外国人用の宿泊室が十数室もあった。井上外務卿は帰国いらい、東京に外国人のための接待所と宿泊設備を作る必要性を痛感していた。そのころ、外国から貴賓の来日が相次いだ、彼らを満足にもてなす場所がなく、その上、政府の高官のほとんどが西洋のマナーを知らず、とても西欧社会に仲間入り出来る状態ではないと思えた(この点は兼寛もまったく同感で、彼は自分の医学校の生徒にさかんに西欧式マナーを教えている)。そして、明治政府の長年の懸案であった条約改正の交渉が難行しているのも、日本がまだ西欧諸国から文明国と見なされていない



鹿鳴館。ここで日本最初の慈善バザーが盛大に举行された(1884)。有志共立東京病院の看護婦教育所を建設するためであった。

ためではないか、わが国にも西洋なみの接待所を作り、外国からのお客を十分にもてなせば、日本も文明国になったことを認め、条約改正も可なり有利に展開するのではないかと考えた。ベテラン政治家の井上外務卿がどこまで本気でこのようなことを考えたかどうかは分からないが、少なくとも兼寛をふくめて彼に近い多くの人々は本気でそのように思っていたらしい。鹿鳴館がオープンされると、井上馨の音頭取りで日本の上流社会には西洋に追い付け追い越せという西欧化の嵐が吹きはじめた。同館では毎夜のように晩餐会や舞踏会が開かれた。兼寛らも、日本の文明開化のために、同時に有利な条約改正のために、この欧化運動に積極的に協力していった。

兼寛にとって最も印象深かったのは鹿鳴館における日本最初の慈善バザーであった(明治17年)。このバザーの総裁は有栖川宮御息所、会頭は大山巖夫人捨松、副会頭は伊藤博文夫人梅子、井上馨夫人武子、森有礼夫人常子の三人、その呼びかけ人は大山捨松であった。そしてこのバザーの目的は有志共立東京病院に看護婦教育所をつくるためであった。アメリカ留学から帰ってきた新知識の捨松はある日、同病院にいったところ、病院には正規の看護婦が一人もいなかった。高木兼寛院長にそれをきくと「お金がなくて、それどころでは」という答え、捨松「では私が作りましょう」ということで、この

バザーが開催されることになったという。こうして同病院では、このバザーの収益金と、翌年さらに同じ夫人たちによって集められた収益金によって、看護婦教育所が建設された(明治18年)。わが国最初の本格的な看護学校であった。

このようにみえてくると、鹿鳴館を中心にした欧化運動は、兼寛にとってはそれほど跳び上がったものではなく、むしろ愛国的であり、同時に人道的でさえあったのである。

兼寛の〔大和魂〕と〔忠孝〕について

兼寛は晩年全国各地で講演を行っているが、またそれをまとめて「心身修養」という一冊の著書にもしている。数少ない著書の一つであり、彼の思想を知る上できわめて貴重である。その中で、彼は自分の愛国思想の中心となるべき〔大和魂〕と〔忠孝〕についてくわしい説明をこころみている。ここにはそれについて簡単に論評してみたい。

ふつう大和魂といえ(とくに筆者などには)、現実的な力では到底叶わないものにたいして、何とか精神力で耐えろとか、対抗するかといった、念力のようなものを連想しがちであるが、兼寛のいう大和魂にはこのような精神主義的な意味は全くふくまれていない。大和魂の重要な性質として彼は次の三つをあげている。すなわち、その第一は“優しさ”であり、第二は“淡泊さ”であり、そしてその第三は“素直さ”である。そして以下のように説明している。

「優しさとは乱暴の反対であります。その一例としてお話を申せば、さる明治38年、上村彦之丞大將がわが艦隊をひきいて蔚山沖で敵国(ロシア、筆者注)の艦隊を撃沈させ帰りなされる途中、救いを求めているロシア兵をみて同大將は気の毒であるから一同救い上げろと命令された。そのために救い上げられた者は700有余名であったことは、どなたにも御承知である。世界の人はこの事を聞いて、日本人は奇態だ、非常に優しきところがある、耶蘇教国の人も及ばぬような優しいことをすると評したのであります。即ち私の耳にした処では、戦闘中多忙なのに700何名というものを救うなんて馬鹿げた話ぢやないか、うっちゃって置いてよいのに、おれの国なら打ち殺してしまうだろ

うといった人があったと聞いております。然るに事此に出でずして、世界の人は非常に上村大将の行動を歓迎した。かような点がすなわち大和魂の特徴と申してよからうと存じます」。このように彼は、大和魂の最も大切な性質として、人の命を尊重する優しさ（人間愛）をあげるのである。

第二の性質は“淡泊さ”である。大和魂は“あっさり”していないといけないという。そして桜の花の散り際のよさを例にして、また本居宣長の歌（敷島の大和心を人とはば 朝日に匂ふ山ざくらばな）をひいて説明している。この“優しさ”と“淡泊さ”を備えた魂は、もう第三の性質“素直さ”を十分備えることになるという。そしてその“素直さ”については「つまり真直ぐという意であります。真直ぐなものはいくらでも沢山合わせることが出来ます。何万本あっても合います。然るに曲がったものは僅か二本でも合わせることが出来ませぬ。真直ぐなるものの合う具合を和すると申します。大和という字は和合して離れぬと解釈するのが穩当であろうと思います」と説明している。

では次の問題、兼寛の考える〔忠孝〕とはどんなものであろうか。かつて我々が教えられた〔忠孝〕とは、〔君に忠、親に孝〕の意であった。しかし兼寛による解釈は、これまた我々の意とは全くことなるのである。彼の〔忠孝〕とは、この優しい素直な〔大和魂〕をつくるための“方法”であるという。

「大和魂というものをどうして作るかと申しますと、すなわち忠孝の道であります。忠孝の道をもって養えば大和魂ができます。ここにおいて忠孝の説明に関する愚見を述べてみます。……忠という字は我と宇宙との関係を示したもので、宇宙・森羅万象からの声（教え）に感応して言葉になったものであります。宇宙からの声をよく了解して適切に答えることが吾人の宇宙間に生存する不変の方法であると思います。……次に、孝という字であります。これは“準ずる”という意味であります。“真面目に従う”ということでもあります。したがって、いまの忠と一緒にして忠孝といたしますと、宇宙から聞こえてくる真理、教えに真面目に従うということになります。」というのである。

このようにみえてくると、兼寛のいう大和魂と忠孝とはもともと一体となるべきものである。宇宙からの教えに従って行動するとき、その教えは大

和魂を鍛えながら、また大和魂によって大いに（優しく素直に）修飾されながら、日本人として相応しい行動に昇華されるというのである。そして兼寛の場合、宇宙の声を伝えてくれるものとしては、外国からの知識、天皇の言葉（勅語）、為政者の教え、教育者の教え、父母の教えなどきわめて具体的ものをあげている。また歴史的なものとしては神道、儒道、仏道なども宇宙の声として大和魂を大いに鍛え養ってきたという。

兼寛の大和魂、忠孝の内容は大体このようなものである。ちょっと分かりづらいところもあるが宗教的であり、またきわめて人間的かつ現実的である。現在の我々からみてもおおよそ受け入れにくいものはあまりない。ただここで問題になるのは、宇宙からの声を伝えてくれるものとしてどのような伝達者の言葉を重く聞くかによって、その人の行動がかなり変わってくることである。例えば、兼寛は「大和魂の意味は億兆心を一つにすることです。ありますから、今日のように甲乙丙丁党派を立てて、これを以て右往左往に行動するが如きは、大和魂の極意と相反するように思っております」として、自由民権運動にはかなり批判的であったが、これなどは、彼が明治政府の支柱になっていた伊藤（博文）、井上（馨）、松方（正義）ら有司的政治家の近くにあり、しばしばその声を聞いていたためではないかと思われる。